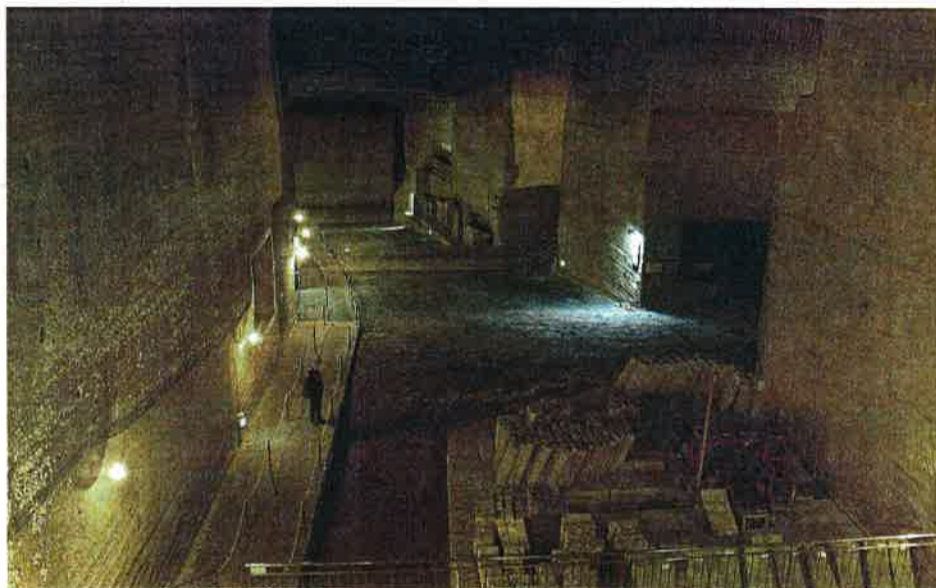


# 大谷石の“地下宮殿”

## 宇都宮市

宇都宮市郊外で産出する大谷(おおや)石は古くから建築資材として用いられてきた。その名が一躍脚光を浴びたのは、米国の建築家フランク・ロイド・ライトが東京・日比谷に旧帝国ホテルを建てる際、自ら望み資材に採用したことだ。ライトを虜(とりこ)にした大谷石の魅力を産地に訪ねた。



カトリック松が峰教会は祭壇も大谷石できている



地下に広がる採掘場跡地。左中央の見物人が豆粒のようにみえる

## 採掘場跡、最深部は60メートル

大谷石の歴史は古い。関東北部では奈良時代から寺社の建築資材に使っていた。近年、その名が広まったのはフランク・ロイド・ライトの功績が大きい。大正時代に旧帝国ホテルの設計を任せられたライトは、いくつもの建築石材候補から大谷石を選んだ。乳白色のやさしい色合いを気に入ったらしい。採掘も人任せにせず、自ら宇都宮を訪れ、岩肌の模様を見比べながら切り出し方も指示したという。

旧帝国ホテルは大正12(1923)年に完成し、9月1日に落成式典を迎える。だが、まさにその当日、首都を関東大震災が襲う。建築物の崩壊・焼失が相次ぎ、東京はがれきの山と化した。旧帝国ホテルはびくともしな

かった。堅固で耐火性も高い大谷石の性質が滅災に奏功し、その評価はさらに高まった。石材の中では柔らかく細工を施しやすい点もライトが大谷石を採用した理由の一つだ。それは資料館近くの平和観音にうかがえる。高さ27メートルの観音像は戦没者の慰霊のために、昭和23(48)年から6年の歳月をかけて造った。もともとは自然の崖壁。そこから人手で彫り出したというから驚かされる。柔和な表情や衣の滑らかなうねりなどがきめ細やかに表現されている。

旧帝国ホテルは一部が移築され、今は愛知県で公開されている。そこまで足を運ばなくても

### ☆旅支度

採掘場跡が見学できる大谷資料館(☎028・652・1232)は入館料大人 600円。年末年始を除き年中無休だが、映画などのロケに使われることも多く、訪問前に確認しておきたい。

大谷石造りの蔵や倉庫を改装した飲食店も点

在。食べ歩きも楽しい。「Dinning 蔵おしゃらく」(☎028・638・0409)はカトリック松が峰教会のすぐ前。「悠日カフェ」(☎028・633・6285)は米蔵を改装し、ギャラリーも併設する。むき出しの大谷石の壁に囲まれ、落ち着ける空間だ。

### 石造りの店 食べ歩きも

市内には大谷石を使った建造物がいくつも残っている。その代表がカトリック松が峰教会だ。完成は昭和7(32)年。劣化も見られたが、2001年に修復工事を施し、鮮やかによみがえった。2つの尖塔(せんとう)がそびえる四層の教会は、ビルが立ち並ぶ市街地で異彩を放つ。司祭の御前ザビエル氏の許しを得て、教会内部もみせてもら

った。柱や壁に加えて、祭壇とその傍らの聖書朗読台も大谷石製だ。威厳にあふれた外観に反して、内部は温かみを感じさせる。「石なのに硬い印象を与えない。外部の音の侵入も防ぎ、静かに過ごせる」とザビエル司祭はその魅力を話してくれた。柔らかな乳白色の大谷石に囲まれて、心は静かに落ち着いた。(編集委員 石塚由紀夫)

八年ほど前、転職の際にイエメン

トラベルナビ

「いえー」